

家庭教育というものは、夫婦が同じ方向で子どもを育てようとしないうまくいきません。どんな子どもに育てるのか、どんな教育をするのか、しっかりと話し合うことが必要です。

できれば、子どもが生まれる前から夫婦で相談しておくことが大切です。夫婦の一番大きな仕事というのは、子育てだからです。

いくら父親が外で働いているといっても、わが子を立派に育てる責任は、母親と半分ずつ持たなくてはなりません。よく話し合っ、両親が納得した上で育てることが大切です。

どんなに忙しい父親でも、子どもの教育というのは楽しいはず。子どもと遊ぶということは気分転換にもなります。

そういう意味では、父親の役割も非常に大きいのです。無関心であっては困るし、ましてや子どもの教育に対する考え方が母親と反対というのでは困ります。

教育の「教」という字の右側には「父」という文字が使われています。昔は、父親は外に働きに行くのではなく、家の中で仕事をしていました。子どもは、父親の仕事を見て育ちました。そして父親のやり方の真似をします。真似をすることを、日本では「真似ぶ」といいました。

この「真似ぶ」という言葉が「学ぶ」に変化したのです。今使われている「学ぶ」とは少しニュアンスが違って、本来は真似ることを意味しています。では、誰の真似をするのかというと、父親です。真似をしたときに、指導助言をするのが父親の仕事です。

「そういうときにはこうするんだよ。それじゃ手を切ってしまう……。こういうように持ってやれば怪我をしないんだよ」

これが“教える”ということなのです。

教育の本質は父と子が交わることです。一緒にいることが教育の原点なのです。そして子どもが自主的に父の真似をする、これが学問の「学」の始まりです。学ぶときには、当然のことながら父親が指導助言します。それが独立して「教」という字になるのです。漢字の成り立ちから調べていくと、「教」という字と「学」はまったく同じなのです。

ポイント:テレビで育った子どもには、自分で自分の世界、つまり煩わしくない自分一人の世界に閉じこもってしまい、言葉が吸収されなくなっているケースが多く見られます。たくさんの言葉が頭に入らないから頭脳が発達しません。いろいろな言葉を使って体験を頭の中に認識できないと、智慧というものは蓄積されないわけです。